Magazine for Industrial Design

Design News

Japan Industrial Design Promotion Organization

特集：フィンランド・デザインの結晶



223

CLOSEUP

丘を越えて行こうよ

クロスオーバーする3人のデザイン活動

酒井俊彦

今回は、消費者無視の専門ばかナルシストデザイナー(少しひどすぎるかしら?)の対極にあるクロスオーバーな人達を紹介しようと思う。

まずはPHデザイン。6人のメンバーは、グラフィック、建築、CG、IDのそれぞれの専門家。最近活動を開始した彼らは、基本的に自分のとってきた仕事は自分でプロデュースするという方法をとっている。つまり、グラフィックデザイナーがIDの仕事をとってきた場合、グラフィックデザイナー自身が主体となってその仕事をこなすのである。この時、IDデザイナーは専門的なパートの補佐役に過ぎない。これは彼らがデザインの表現ジャンルに関して特にこだわりを持っていないことを示している。メンバーの一人でIDが専門のグリナール・ニコラス氏(メンバーのうち2人が外人)は、デザインコンセプトの立案に多くの時間を割いている。「現在市場に出回っている家電製品の多くは、その製品の性格と形が一致してない。シェイプはコンセプトを具現化するための手段であり、もっと広い意味で捉えれば、デザインジャンル自体も、何かを表現するための手段でしかない。だから、専門知識のアシストさえ受けられれば、ジャンルにこだわる理由は何もない。」と語ってくれた。現在、彼はスペースデザインから、全く新しい考え方の自動車のコンソールパネルまで幅広いジャンルの仕事を手掛けている。

デザイン業界の外からの越境者も多い。名古屋芸大の教師をしつつ、銀食器等のデザインもしつつ、職業はと聞かれたら、アーティストと答える瀬田哲司氏。答えるだけでなく、きちんと現代美術のアーティストで、いくつかの作品は美術館に収蔵されている。が、彼は、コイズミの照明コンペで銅賞をとったり、毎日広告賞で優秀賞をとったりもしているのである。多芸多彩。彼にとって、プロダクトデザイン等の商業ベースの仕事は、専門家、細分化されたデザイナー達とは違った視点を求めるクライアントの要請として存在している。デザインとアートの垣根は彼にはあまり意味をなさないものらしく、クライアントの存在する仕事もとくには意に介していないようである。私の知っている限りでは、アーティストのかなりの人が、デザインとアートの違いを、クライアントのある無し、頼まれて物を作るか自主的に作るかで分け、デザインを多少見下すきらいがあるが、彼にとってデザインはアートを表現する手段の一部のようだ。

瀬田氏の場合、そのデザイン活動は、アートの付随的なものであるのだが、永井宏氏は、商品流通自体をアートとして捉えている。写真から出発した彼のアートは平面作品が多かったのだが、最近食器類の制作を始めた。これらの作品がフツーの商品として一般家庭に入っていき、いつのまにか多くのアートが家庭の中に入り込んでいたという状況を、過程も含めてアートとして捉えているのである。雑誌「ブルータス」の編集に6年間携わった彼は、多くの虚構の世界を見続けてきたはずである。その彼が、芸術や、モノを作るということの原点である「生活に役立つということ」に立ちかえっての試みなのだ。それなら、IDの基本的な理念と同じじゃないかという私の間に、「そうかも知れないがいまのIDデザイナーはそれを実行していない。馬鹿みたいに高価なデザイナーズグッズや、いらない機能のいっぱいついた家電製品。多くの人の生活から遊離しているこれらの製品はすでに虚構の世界のものになってしまっている。」と手厳しい。

まあ、本当にそんな奴がおるんか〜! というようなターゲットユーザーなんかを決めて、ちゃらちゃらしたイメージボードで商品開発していればそうなるのは当たり前かもしれない。

彼らの話を聞いていて共通していたことは、何を表現するかという明確な意志と、作品の受け手はそれを使う人であるという認識だった。

最近、私が多くの工業製品や、IDデザイナーから感じるのは、たとえば、製品が何であれ、自分がイルカのシェイプを表現したいと思ったら(おおよそ製品の特質とは全く関係なく)、ほとんどこじつけの理屈でイルカのシェイプを表現することに熱中するようなナルシスト的感覚と、製品の受け手は、クライアントまたは販売店という錯覚である。

コンピュータの急速な普及も手伝ってクロスオーバーな人達がどんどん増えつつある現在、彼らのニュートラルな感覚が、IDデザインと消費者の関係を実体験に基づいたものに引き戻すことを期待したい。



プレート(D=永井宏)
消火器(D=グリナール・ニコラス)
ドッグオンザビーチ(D=永井宏)
カトラリー(D=瀬田哲司)
瀬田哲司 個展会場







